

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第 194 号

古老は語る
宮野薫さんのお話 1

岡上の人々と戦争（その 1）

（聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘（柿生郷土史料館専門委員））

はじめに

筆者（小関）は和光大学在職中の 2021 年度まで同僚の堂前雅史さんと「地域・流域社会論」と「地域・流域政策論」の授業を共担した。授業にはゲストをお招きして、地域に関する豊かな知見や専門領域についてお話し頂いてきた。

1929（昭和 4）年のお生まれで、岡上町内会副会長、岡上神社氏子総代表、柿生禅寺丸柿保存会会長、岡上郷土誌会会長など地域の数々の要職を務めて来られた宮野薫さんは、岡上の昔の暮らしや文化の様々についてお話し頂ける「社会論」のメイン・ゲストである。薫さんは農業や地域文化に関して多くの文章を発表して来られたが、書き溜めた未発表原稿を筆者は折々に頂戴していた。その数編をまとめて、在職中に和光大の『表現学部紀要』22 号（2022 年 3 月）に筆者と堂前氏による注釈を施した「[注釈] 岡上の暮らしと社会の諸相--岡上在住・宮野薫さんの文章」を公開した。



宮野薫さん

今月から短い連載でご紹介するのは、それらとは別に、筆者が和光大退職後の本年 1 月に授業云々を抜きに、ご自宅にお邪魔して 1 時間半近くお話を伺ったインタビューの広義の「記録」である。薫さんが予め用意して下さった箇条書きの「メモ」を基に、その時の録音からの書き起こしを混じえ、薫さんの回想に筆者がコメントを付す形を採った。

インタビュー当日にはサポート役として薫さんの次女の安楽満里子さんにご助力を頂き、当日頂戴した A4 の「メモ」のプリントはご長女のお連れ合いの星野勝己さんが作成して下さいました。

また、小関が仮にまとめた「下書稿」を薫さんにチェックして頂く際と、薫さんが新たに手書きで加筆して下さいました 2 項目をパソコンで打ち直す際に、長女の星野朋子さんのご協力を頂いた。

なお、薫さんの元「メモ」及び当日のインタビューで新たに語られた話柄はゴシック体で、小関のコメントは明朝体 2 字下げで記した。

1945（昭和 20）年 8 月に満 15 歳だった宮野薫さんの「メモ」は戦争関連の事柄から始まる。

* 以前近くに住んで居た傷痍軍人から聞いた話。中国戦で敵陣に向け撃ち合っている時は怖いと思わなかったが、負傷して担架で運ばれる体になったら急に恐怖心が湧いてきた。

・傷痍軍人は 1931（昭和 6）年 11 月まで「廃兵」と呼ばれた。戦場で負傷した兵士の、国家による終生扶養を目的に 1906（明治 39）年 4 月、廃兵院（後に傷兵保護院→軍事保護院と改称）が作られたが、第二次大戦後、軍事保護院は廃止された。だが、1952（昭和 27）年 4 月に戦傷病者戦没者遺族等援護法が制定され、同年 11 月に日本傷痍軍人会が発足。1955 年の会員は 35 万人だったが、2013 年 11 月に会員の高齢化を理由に解散した。（小学館『日本百科大全书』等参照）

・『現代心理学辞典』（有斐閣）に「恐怖反応」は「ヒトでは（略）物理的脅威だけでなく、心理的・社会的脅威によっても惹起される」とあるように、銃弾が飛び交う戦闘の物理的な現場から離れた後に、自分があそこで死んでいたかも知れない云々という思いに直面して心理的に引き起こされた恐怖体験だろう。

*（機関銃射手として出征していた岡上・川井田地区の）E・H さんから聞いた話。軍務で中国の蘇州に居た時だと思いが仁丹の広告が目に入りとても懐かしかった。

† E・H さんとしたが、薫さんの「メモ」では実名。

・「仁丹」は創業の 1905（明治 38）年から「大礼服マーク」を商標とした。1908（明治 41）年には中国全土の郵便局に仁丹と宣伝ビラを送り委託販売したほか、（以下 4 ページへ続く）

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 4

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(4)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

果実生産額からみた柿生村・岡上村の禅寺丸柿

禅寺丸柿の栽培は、農家の主屋や蔵の周りなど屋敷地内に数本から十数本と栽植されてきた。ほとんどの農家が個別に植えてきたものである。樹木の手入れが特に難しいわけでもなく、植えたまま放任しておくケースが多い。ただ柿樹は、隔年に豊凶があることから、剪定に相当する枝折りを3月に行ってきた。

そこで、昭和初期における柿生村・岡上村での果実の生産額と川崎市・多摩川流域の村及び都筑郡の村別の生産額とを比較し、柿生村・岡上村が柿の一大生産地であったことを再確認したい。使う資料は、『統計パンフレット 本県の農産額』(昭和11年 神奈川県)である。最初に昭和10年(1935)末現在における川崎市、日吉村、高津村、橘村、宮前村、向丘村、生田村、稲田村(以下、「1市7か村」と略す)での果実(桃・梨・柿など)の総生産額から概観してみる。1市7か村の果実の総生産額は65万7,814円で、このうち稲田村(登戸・菅・中野島・宿河原・堰)が生産額36万3,298円で、実に総生産額の55.2%を占め、多摩川流域での梨・桃の一大生産地であったことを示している。次いで川崎市の9万5,779円(14.6%)、日吉村(矢上・駒林・駒ヶ橋・箕輪・南加瀬・小倉・鹿島田)の7万4,031円(11.3%)、高津村(溝口・下作延・久本・坂戸・二子・久地・北見方・諏訪河原)の5万2,536円(8.0%)と続いている。一方、生産額が少ない村は、橘村(千年・新作・子母口・久末・明津・蟹ヶ谷)の1,681円(0.3%)と宮前村(梶ヶ谷・野川・馬絹・有馬・土橋)の770円(0.1%)であった。これら橘村・宮前村のように、多摩川流域から内陸に入った丘陵地では、果樹栽培に替わって米・麦・蔬菜・花卉・製茶などの従来型の農業生産が盛んであった。桃や梨といった果樹栽培に適した沖積土が豊かな多摩川流域の村々と土質が異なっていたことが大きな要因となっただけでなく、

禅寺丸柿の産地として知られる岡上村は、果実の生産額は都筑郡1町10か村中第8位で、生産額は4,184円と金額自体は少ない。しかし岡上村の総生産額2万3,216円中に占める果実の生産額は4,184円(18.0%)と、高い割合にあった。岡上村では、米・麦・蔬菜の生産額が17,742円(76.4%)と大きなウエートを占めていた。生産額が210円と少ないが製茶も行われていた。このように岡上村では、年間を通して安定的な収入増を図るための農業経営が行われていたと考えられる。一方、都筑郡における果実の総生産額は14万7,200円で、このうち第1位は柿生村の4万2,575円で、総生産額の28.9%を占めていた。岡上村の4,184円を加えると果実の総生産額に占める割合は、実に31.8%に達する。ここでいう果実とは、禅寺丸柿が主とみてよいだろう。禅寺丸柿の主要な産地であったことが数値にも現れている。次いで田奈村の3万363円(20.6%)、新田村の1万367円(7.0%)、川和町の1万4,823円(10.1%)、都岡村の9,396円(6.4%)、中川村の9,305円(6.3%)と続く。中里村(青葉区及び緑区の一部)や新治村(緑区及び保土ヶ谷区の一部)は、村の総生産額中に占める果実の生産額は少ないが、これも岡上村と同様に米・麦・蔬菜の生産額が大きなウエートを占めていた。谷本川(鶴見川)及び恩田川流域に複雑に開析した谷戸と丘陵の斜面地や家の周りの畑で農業が営まれ、収穫した様々な農産物を京浜市場に出荷していた。小鳥のさえずりが聞こえる長閑な純農村風景が続いていた。

片平川が下麻生で本流の鶴見川に合流する付近に柿生村と岡上村が位置している。岡上村の東光院付近での標高は、約42mを数える。閑寂さと深い緑におおわれた谷戸の雑木林を縫うように張り巡らせた小坂の小径が続く。空気の清澄さには驚くばかりである。農家の庭先や隣接する畑の脇には、丹精込めて栽培してきた柿の古木がみられる。柿生村と岡上村で、代々にわたって大切に守り育てられてきた柿樹が禅寺丸である。

(続く)



木箱に貼ったラベル「本場禅寺丸 新治の甘柿」
筆者蔵 大きさ 縦19cm×横26cm

シリーズ
歴史の中の女性像

その1 ナイチンゲールの世界 (11)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

ヴィクトリア女王の信書と内閣の交代

フローにはハーバート軍務大臣の強い支えがありましたが、スクターリの司令官は後方支援の軍務大臣を軽視し、戦闘部隊を指揮する陸軍大臣の命令を盾に、フローたち看護士部隊の要望を、なかなか認めようとしなかったのです。フローにとって有難かったのは、『タイムズ』をはじめ新聞各紙の従軍記者による戦地報道のおかげで、本国から多額の基金が送られてきたことでした。イギリスの上流階級には施しや寄付の文化が根付いています。ナイチンゲール家の令嬢が我が国の名誉のために頑張ってくれているのだから、できる支援を惜しむ理由はないのです。こうして窓口を『タイムズ』紙として『タイムズ基金』と名付けられたナイチンゲール一行支援基金が立ち上がり、委員長にはハーバート軍務大臣のリズ夫人が就任したのです。募金は短期間に大きく膨らみ、手始めに3万ポンドがスクターリのフローに届けられたのです。こうした資金のおかげで、戦傷者や戦病者の収容スペースの拡張や防寒対策などが、次々に実現しました。軍の予算は減らないのですから、司令官としてもノーとは言えなかったのです。

それでも軍の官僚主義に基づく嫌がらせは続きました。戦地の従軍記者たちは、戦時病院で不足している物品についても本国に書き送りました。記事を読んだ篤志家たちは、思い思いに戦地宛に物資を送りました。ところがそうした物品のほとんどが、特に食料品などは病院に届けられなかったのです。軍の官僚主義の悪い面が立ちはだかったのです。荷受人のない荷物は、信頼できない荷物だとして陸揚げされず、最終的には海に捨てられていたのです。フローの戦いは続いていたのです。

12月に入って、フローに嬉しい便りが届きました。ヴィクトリア女王からの親書が送られてきたのです。そこには『タイムズ』の記事を読んだこと。ハーバート軍務大臣から報告を受けたこと。そして女王自身の兵士である傷病兵に対するフロー一行の献身的奉仕を称え、最後に「私に出来ることがあるなら、なんでも遠慮なく申し出るように…」と記されていました。喜んだフローは早速女王に、女王でなければできない願い事を書き送りました。それは負傷兵よりも劣悪な待遇に捨て置かれていた戦地で病に倒れた兵士たちの待遇改善の願いでした。勇敢に戦って負傷した兵士と、病に倒れた兵士とは待遇に差があって当然だとする軍の主張と、戦地の劣悪な環境が伝染病の蔓延を招き、かつ軍務による疲労で抵抗力の落ちた体が病魔に侵されるのだから、負傷兵と同じ待遇が当然だとするフローの主張は、平行線を辿っていたのです。女王のツルの一声が軍の主張を退け、病に倒れた兵士の待遇は改められたのです。

誤解を避けるために捕捉しますが、イギリスの君主制は「君臨すれども統治せず」の原則に立っており、君主の政治的権限は首相を任命することに留まります。そんな中、茶目っ気たっぷりの子供っぽいところを多々持っていたヴィクトリア女王は、政治的なイシュー(争点)とは無縁な事柄などで、時折首相に要望を伝えていたのです。首相の方も心得たもので(なにしろ社交界では、お仲間なのですから)、僅かな予算で済むような事案は、前向きに処理していたのです。女王にとって、スクターリに派遣した看護士監督官のナイチンゲール嬢は、年の近い(フローは2歳年下の妹のような)お仲間の一人だったのです。

しかし、戦地に近いスクターリの病院内部の衛生管理の問題や食糧事情などの問題を、その都度女王陛下にお願いするわけにはいきません。そうした問題は今まで通りハーバート大臣に依頼するしかなく、すぐには改められない事柄も多々あったのです。年が明けて1855年1月、戦争が長引く中、イギリス本国で政変が起きます。首相のアバディーン伯爵の戦争指導に批判が集中し、陸軍の改変を声高に主張していたパーマストン卿に組閣の大命が下ったのです。当然ながらフローと二人三脚を組んでいたハーバート大臣も、閣外に去りました。それでもこの内閣交代は、フローには大きな吉報になったのです。第3回に記したように首相となったパーマストン卿は、社交界にデビューしたフローの後見人を務めてくれた人物だったからです。首相は軍務大臣より、はるかに大きな権限を持っています。しかも彼は陸軍改革の大ナタを振るわんとしているのです。ここにフローと病院幹部との関係も大きく変わる事になったのです。(続く)



首相や外務大臣を歴任した第3代パーマストン子爵(1784~1865)

(1 ページから続く) 前後して天津、漢口、上海に出張所を開設した(森下仁丹公式 HP『森下仁丹百年物語』)。「宣伝活動も国内に負けないうらい積極的に行った。(略)大正時代のはじめ頃には中国大陸での販売は国内をしのぐ勢いにまでなった」。戦時下も売上は順調に推移し、「戦場では万能の護身薬として愛用され、度重なる日貨排斥にもかかわらず輸出も好調だった」(『同』)という記述と符合する証言である。

- ・蘇州には日清戦後に日本租界が作られ、日本は欧米諸国より早く蘇州の商品市場に参入できたという。1896 年から 1945 年までの 50 年間に蘇州には外資企業約 118 社が設立され、うち 98 社が日本の企業だった(厳明「蘇州の日本租界と近代都市の形成」(「神奈川大学 人文研究」2003 年))。

(続く)



昭和 16 年 12 月 13 日
・読売新聞

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日 : 7月14・21・28日(日曜日) 8月3・10・17・24日(土曜日)
◎開館時間: 午前10時~午後3時

第 22 回特別企画展

祝川崎市制誕生百年! 写真で迎える川崎市の百年

6 月 15 日から開催している「写真で迎える川崎市の百年」で紹介している写真の内、麻生区関係の写真を中心に何点かを紹介します。ご覧の皆様が柿生郷土史料館まで足を運んでいただくと幸いです。開館日が少ないので、このページ記載の開館情報をご確認ください。



1914 (大正 13) 年 7 月 1 日川崎市誕生この日市制施行祝賀会が開かれ、子どもたちが日の丸の小旗を振りながら行進した。写真は、行進後の賑わいを撮ったもの。



写真は、川崎駅前。
1972 (昭和 47) 年 4 月 1 日、市制施行から 69 年目のこの日、川崎市は札幌市、福岡市と共に、全国で 7 番目の政令指定都市となった。この日の人口は 99 万 3 千人であった



1945(昭和 20)年、柿生青年団による禅寺丸柿の一斉消毒。「柿栽培改良実地指導機関」による指導を受けて、消毒技法の習得に励んだ。



1950(昭和 25)年の柿生中学校運動会。後方は柿生小学校の校舎。中学校の校庭は狭いため、運動会は小学校の校庭を借りて行われた。



1956 (昭和 31) 年の東柿生小学校校舎。



開業当時の百合ヶ丘駅前。百合ヶ丘駅は、百合丘第一団地の入居開始に合わせ、1960(昭和 35)年 3 月 25 日に、柿生駅に続く、麻生区内 2 番目の駅として誕生した。当時は南口しかなかった。

◆期間/2024 年 6 月 15 日(土)~10 月 26 日(土) ◆会場/柿生郷土史料館特別展示室